

あとがき

鈴木 浩

『ルター研究』第九巻が出版されたのは、二〇〇四年の秋のことであったから、この巻の出版までずいぶん長い中断があったことになる。しかし、二〇一〇年度はルター研究所の開設二五周年という記念の年に当たっているので、二五周年の企画の中に第一〇巻の出版を予定し、なんとか二〇一〇年度の学期内に出版にこぎ着けた。本巻には、ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校の創立百周年の記念として行われた四本の講演を収めた。

『ルター研究』は第一巻から第五巻までは聖文舎から出版されていたが、その後、聖文舎が解散されたので、第六巻以降は、ルター研究所で編集したものを印刷所で印刷してもらう形で発行した。第六巻は岡山にあるサンコー印刷で、第七巻、第八巻、第九巻は三鷹にある文伸で印刷してもらった。今回からリトンが出版を担当してくれることになったので、再び出版社のもとで発行されることになった。なお、第五巻と第六巻とは、日本ルター学会との共同編集によって出版されている。

第一巻は一九八五年、第二巻は一九八六年、第三巻は一九八七年、第四巻は一九八八年という具合に四巻までは毎年発行されていたので、当初は年に一度のペースで発行することになっていたと思われるが、第五巻以降は

ペースが落ち、発行間隔が大きくなった。これは、ルター研究所の所員の多忙が主たる理由であった。専任教員の場合は、大学の規模拡大（神学科から神学科と社会福祉学科の二学科体制への移行、さらにはそれに臨床心理学が加わって三学科体制への移行）に伴う負担増があり、教会に責任を負う所員の場合には、教区長など教会行政の責任や教師会会長など牧師固有の職務を担うなど時間を割かれる仕事のためであった。

ルター著作集第一集と第二集は、それぞれ二巻を残すのみとなった。第一集の場合には最後の二巻、第二集の場合は最初の二巻である。ルターの著作をラテン語やドイツ語から翻訳するのはもともと時間のかかる仕事であるし、訳語の選択などにも時に十分な検討が必要な場合もあって、忍耐のいる作業ではあるが、ルターと宗教改革の伝統を継承するという意味で不可欠なことなので、これからも粘り強く続けていく決意である。

最後に付言の必要があるのは、マイケル・ルートのことである。ルートはアメリカ福音ルーテル教会を代表するエキュメニズム神学の専門家であり、様々な場面でアメリカ福音ルーテル教会を代表して発言してきていた。ルートは、徳善名誉教授も長くその委員を務めてこられたヴァティカンとLWFの国際対話委員会のメンバーとして、ルーテル側のオピニオンリーダーを努めることが多かった。そのルートが昨年（二〇一〇年に）ローマ・カトリック教会に転籍をした。したがって、昨年一〇月にドイツのレーゲンスブルクで行われたその対話委員会前にルーテル側の委員ではなくなっていた。（無論、だからといってヴァティカン側に横滑りしたわけではない。）突然のことだったので彼を知る誰をも驚かせたが、彼が他の委員宛に出した手紙では、一昨年（二〇〇九年）にその決断をしたとあったから、ちょうど本巻に収めた講演をしていた頃のことだったのであるだろうか。しかし、この講演の中では、「私はこの学校の江藤直純先生とは面識があったのですけれども、私が最初に江藤先生

にお会いしたのは、先生がLWFのエキュメニズム委員会でお働きくださっていたときでありました。また、徳善先生とは、カトリックとLWFとの対話のための国際委員会の会合のたびにお会いしてきましたし、また、その同じ対話の委員会では、これからは鈴木浩先生とともに働かせていただけるということで「……」と語っていたので、この時点ではまだルーテルに残るつもりだったのかもしれない。いずれローマ・カトリック教会員としてのルーートの発言も聞こえてくるようになるのかもしれない。転籍といえ、古くはイングランド聖公会からローマ・カトリックに転籍し、枢機卿にまでなったジョン・ヘンリー・ニューマンの事例があるし、まだ記憶に新しいところでは、晩年になって家族共々ミズーリ派ルーテル教会からロシア正教会に転籍した（彼の言葉では「復帰した」）ヤロスラフ・ペリカンの事例がある。ペリカンの場合には著名人だったので、その転籍のニュースは日本の新聞にも出たが、ルートの場合にはそこまでのことはなかった。しかし彼を知る人々には大きな驚きであった。

最後の最後になったが、講演時には通訳を担当され、本巻のために原稿を改めて翻訳してくださいました徳善先生、江藤先生、石居先生には心からの感謝を申し上げます。

二〇一一年二月